



早稲田大学総長 殿

年 月 日

所 属 本庄高等学院

資 格 教諭

氏 名 若 林 正 印

特別研究期間研究成果報告書

1. 研究課題：高校サッカーの現状と今後の課題
2. 研究期間： 2007年 4月 1日 ～ 2008年 3月 31日
3. 研究場所(国/都市・機関名)：
本庄高等学院内 他
4. 研究成果概要(2,000字以内)：

Jリーグが開幕し14年、日本のサッカー界も大きく変動を見せた。1998年に初のワールドカップ出場、2002年には日韓共同開催とサッカー界は新たなスタートをきった。しかし、高等学校のサッカーはどうであろうか。サッカーの人気も上がり、サッカー人口も増えてはいるが、高校サッカーは大きな転機に来ているのではないかと考え、近県の現状を調査すると同時に指導法の研修にも参加し、今後のサッカー指導に役立てたいと考える。

高体連の年間スケジュールについてみると、都道府県によっては多少の違いはあるが、4月関東大会予選、5月インターハイ予選、11月新人戦と大会は3つに限られている。しかし、サッカー協会主催の大会は8月～11月にかけて全国高校選手権大会予選、プリンスリーグが発足し、その予選を兼ねて2月～3月にU-17リーグ戦(2009年より5月～7月に向けU-18リーグに変更予定)また、6月～9月に向け国体の関係もありU-16リーグ戦が行われる。特にU-17・U-16についてはクラブチームも参加し、高体連と協会がタイアップし強化していくのは理解できるが、リーグ戦方式で行われるため試合数が多く、チームによっては人が出ても無理をしてでも出場させなくてはならない状況もあり、健康管理にも問題ありと考える。また、遠征費もばかにならず父母の負担も多い状態である。

高等学校のサッカーレベルはどうであろうか。埼玉県の場合、過去の選手権・インターハイを見てもあまりよい成績は残していない。浦和レッズ・大宮アルディージャユース等、はじめからプロを目指しクラブチームに所属してしまう選手も多い。練習を視察したが、指導体制の違い、選手自身のモチベーションの高さなど素晴らしい環境の下、トレーニングを行っている。このような差があるなかでレベルアップをしなければならない状態を考えると難しい環境にあることがわかる。U-16トレセン(選手強化)の視察においても各校から推薦・選抜された選手が月1回合同練習するが、選手も固定できず、指導スタッフは充実しているもののなかなか成果が上がらない状態である。また、指導者講習会にも参加し、指導法を学ぶことができたが、チームのレベルを考えると基礎技術の習得を徹底しなければならないと痛感した。

クラブチームについてはジュニアユースチームは全国的にも多くのチームがあり組織もしっかり

※研究終了後2ヶ月以内に提出してください。ワープロ原稿の貼付けも可。なお、学術研究活動情報(学術年鑑 Web)のホームページに掲載しますので、電子メールでも研究支援課まで(tokkenseika@list.waseda.jp)ご提出くださるようご協力をお願いします。

.....

.....

.....

.....